

河野哲也・土屋陽介・村瀬智之 監訳
マシュー・リップマン 著
『探求の共同体 考えるための教室』

玉川大学出版部 2014年 A5版 460頁 ¥4000(税抜)

藤原 敬

現行の教育を批判する場合にとりうる立場として、二つの立場が考えられる。

一つは、教育そのものに内在する暴力性や、教育を行ううえで必ず付随すると考えられる他者侵害性をあげつらうことで、「教育＝悪玉」図式を描き出して、脱学校を主張する立場。もう一つは、現行の教育に含まれる暴力性や他者侵害性を指摘しつつも、それをいかに乗り越えて、よりよい教育の構築をめざしていくかを考えてゆく学校再構築の立場である。

前者を「脱学校」論、後者を「学校再構築」論とよぶとすると、マシュー・リップマンの『探求の共同体 考えるための教室』は、「脱学校」論の立場から提示された教育に対する批判を正面から受け止めつつも、どのようにしたら、学校を生き生きとした集団的な探求の場にすることができるかを模索した「学校再構築」論であるとみることができる。(I. 思考力のための教育〈第1章、第2章、第3章〉)

「学校はおかしい」「学校は遅れている」「学校がもっと居心地の良い場所だったら良いのにな」という学校に対する漠然とした不満は、多くの人が経験的に感じえるもので、アカデミズムの世界においても、多くの論者が、その不満に便乗して学校批判を繰り返してきた。

しかし、「脱学校」論においてはさることながら、「学校再構築」論においても、現行の教育を内側から組み替えていく実効的な対案を体系的に示した教育理論は少ないのではないだろうか。

本書は、まさに、このような「学校再構築」論の行き詰まり状況を打開する可能性を多分に含んだ教育論であるといえる。

II. 探求の共同体(第4章、第5章)や、III. 思

考のオーケストラ(第6章、第7章、第8章)では、理論的基礎を伴いつつ、具体的に「探求の共同体」をつくってゆく方途についての詳細な検討が行われている。さらに、IV. 思考をよりよいものにしていくための教育(第9章、第10章、第11章、第12章、第13章)では、これまで多くの論者がさかんに述べ立ててきた「批判的思考」を再吟味してとらえなおすとともに、「創造的思考」と「ケア的思考」という概念を合わせて、多元的思考アプローチという新たなモデルの提示がなされる。

II～IVを概観してわかることは、方法論における具体性と理論的基礎の重厚さ、そして、従来の研究の到達点を乗り越えてゆく革新性という点において、リップマンの構想は、これまでの「学校再構築」論よりも優れているということである。

また、本書において注目されるべきもう一つの点は、「探求の共同体」において重要視される丁寧な概念の吟味が、まさに、本書のなかでなされているということである。つまり、「探求の共同体」とは何かを明示する本書そのものが、「探求の共同体」で重要視することは何かを語りかけているのである。この点は、教育論を考えるうえで、これまでそれほど重要視されてこなかったように思われるが、民主主義を実現するための教育が民主主義的に行われなければならないということと同じように重要なことであるように思われる。つまり、「探求の共同体」論が「探求の共同体」的に書かれることの重要性である。そのように考えると、本書の説得力は、その理論の豊饒性ということもさることながら、リップマンが、「探求の共同体」論で重要視されていることを忠実に守っているという一貫した態度からも得られているのではないだろうかと考えられる。

リップマンの「探求の共同体」論は、ただ批判を述べ立てるだけに終わっていた「脱学校」論と、具体的な方法を伴わずに理念を提示するに留まっていた「学校再構築」論、この両者の行き詰まりを打開する体系的学校改革論を実直に一貫した態度で追い求めた教育論として、今、まさに、教育現実の変革のために求められているのではないだろうか。